

闇と一対の光

# MESSAGE



浅井慎平  
ASAI Shimpei

プロフィール

1937年、陶芸の街・愛知県瀬戸市に生まれる。早稲田大学政治経済学部在学中に映画作家を志してシナリオを書き、撮影所に通っていた。学園祭のパンフレットのカバーのために写真を撮ったことで、写真の面白さに気づく。グアム島の日常風景を写した『ストリート・フォトグラフ』『ビートルズ・東京』の写真集で独自の視点が注目され、デビューを果たした。その後、チャック・ベリーの撮影で東京アートディレクターズクラブ最高賞などを受賞。写真表現の他に、文芸、音楽、映画、工芸など、さまざまな分野でも活躍している。レコード『サーフブレイク・フロム・ジャマイカ』ではゴールデン・ディスク賞を受賞した。1991年には、美術館のある風景をコンセプトとして、南房総市千倉町に「海岸美術館」を設立した。地球環境問題に強い関心を持ち、主として水辺や歴史的視野からの風景などを撮影し、シンボジウム、テレビジョンにも積極的に参加、時代に新しい風を送っている。大阪芸術大学大学院教授。

僕が写真を始めた頃は、光を観察しなければ写真は撮れなかった。光をどうコントロールするかというのが、写真の出発点でもあったわけです。今のカメラはシャッターさえ押せば写るように進歩したので、光を見ることをしなくてもいいんですね。光に対しての考えが非常に変わってきた。極端なことを言えば鈍感になっている気がします。

便利な時代にはなったんですが、それと引き換えに無くしたものも沢山ある。新しい文明を手に入れるということは、それまでの文化を無くすことになるから、光にも同じことが起きているんじゃないかなと思います。

ヨーロッパの夜は基本的に暗いです。あの暗さはいいですね。夜は暗いものだという前提があるから、夜を昼間のようにしようとは思っていません。日本はそのあたり無神経だと思う。そこには防犯とか、いろんな問題が関わって来ることかもしれないですが、少なくとも、夜の闇を照らしている感覚がヨーロッパにはあるような気がします。日本は闇というものを消そうとしていますよね。

昔の人達は、自然の光、季節の光というものをすごく

意識していましたから、いつ頃になるとどこから光が入って来るとか、この季節になるとどうなるとか、分かっていました。間取りを考える時も、窓の作り方もそれに従っていました。今はそれを、人工の光で創れるからいいんじゃないかな、というようになってしまいます。

でも、そういうことじゃないと思うんですよね。自然というものをどのくらい、どういう風に利用するとか、あるいは、味方に付けるとか、生活の中に取り込むとかが、非常に大事なことだと思います。ヨーロッパの教会のステンドグラスは、光を計算しているので、時間帯によっては、素晴らしい気品があります。そういうことを、現代の文明は忘れ去っているので、もったいないですよね。

自然の中にどんな風に光があるのかということは、当然、どんな風に影もあるかということでもあります。自然の中の光と影が、どのくらい自分の中で意識して持っているのか、感じているのかがあった上で、人工の光についての考えが始まるんじゃないでしょうか。人工の光をどうコントロールするかは文明文化ですから、ちゃんとした答えを持っていかなければならない。結局、人工の光を考える時も、自然の光について何らかの考え方を持つないと、人工の光のコントロールやセッティングの仕方とかが変わってしまうと思います。

画家がそうであるように、絵を描くということは光を観察することであるし、同時に影を観察することでもあります。物が存在していることを観察するためには、光

が無いと真っ暗で見えないですから、画家がデッサンをするのは、石膏などの白い物に当っている光を写し取るわけです。それが写真にも同じように起きるわけです。なぜ、その絵がこのように見えているのかということを理解しないとダメです。そういうことを考えるのが、画家であり写真家です。それをどう観察するのか、影はどうあったのか、光はどこに当っていたのか、そういうことが一瞬のうちに見えるかどうか、それが表現の中の「技」の一つなんです。

一番忘れてはならないものが、光は自然であれ人工のものであれ、闇と一対のものであるということ。闇、影と一緒にになって考えることをしないと、光の面白さとか、素晴らしさとか、怖さとかが、見えてこない。光を分かるために、反対にある闇であり影であるもの、それを考えることに尽きます。言ってみれば、人間が生きて行くということは、死を考えることで生きる意味が見えてくるのと似ていますね。死ぬということは、光が消える、見えなくなることですからね。そのくらい、光というものはありがたく尊いものです。

闇があるから光があるわけで、どちらが欠けてもだめだということを忘れないことですね。そうすればライティングの計画も、あるいはそういう文明を作り出すということも、光に対峙することも、見えて来る気がします。

小樽港の夕日(写真:塚本敏行)